

いのち 生命のにぎわいとつながり

No.48

平成28年5月

県では、絶滅危惧種対策として、県内の希少生物のうち特に絶滅が危惧されているミヤコタナゴとシャープゲンゴロウモドキ、ヒメコマツについて、市町村や地域住民、NPO団体等と協働して保全活動を実施しています。

本号では、昨年度、天然記念物指定40周年、国内希少野生動植物種指定20周年を記念して開催したミヤコタナゴ保全シンポジウムの第2弾として、平成28年2月20日(土)に県立中央博物館講堂で行われたシンポジウムについて紹介するとともに、房総のヒメコマツ観察会と生命のにぎわい調査フォーラムの開催結果についても報告します。

平成27年度ミヤコタナゴ保全シンポジウムを開催しました

平成 27 年度 **絶滅危惧種** **天然記念物** **国内希少野生動植物種**

ミヤコタナゴ 保全シンポジウム



ミヤコタナゴは、かつては千葉県内に広く生息していた、千葉県を代表するコイ科の淡水魚です。しかし、定置罾の悪化や外来種の影響などにより、現在では絶滅の危機に瀕しています。本シンポジウムでは、ミヤコタナゴの魅力と不思議な生態、地域での保全活動等について、写真家、自然保護団体、自治体などの方々から紹介します。そして、千葉県のミヤコタナゴを守るために、参加者の皆さんとその関係者を募集します。

『**小さな希少種が未来のために今できること**』と一緒に考えてみませんか。

**平成 28 年
2 / 20
(土)
10:00~16:30**

入場無料 定員 150 名 (当日受付)

会場 千葉県立中央博物館 講堂
千葉市中央区青葉町 955-2

お問い合わせ先
千葉県生物多様性センター
電話 043-265-3603 / FAX 043-265-3615
ウェブページ <http://www.bdcchiba.jp/>

主催 千葉県、環境省
後 援 文化庁、千葉県教育委員会、御宿町、茂原市、いすみ市、勝浦市、日本魚類学会



図1 シンポジウムのポスター及びミヤコタナゴ(♂)。右下は、御宿町ミヤコタナゴ保存会 伊藤 博明会長(右)と生物多様性センター 御巫 由紀(左)によるインタビュー。

本シンポジウムは、千葉県内外でミヤコタナゴや他の淡水魚類の保全に関わっている魚類写真家、地元保護団体、地元市町、研究者、自然保護団体等の19名から、ミヤコタナゴの魅力と不思議な生態、保全活動などを紹介していただきました(図1)。当日は、県内外から延べ90名の方々に参加していただきました。

シンポジウムの各演題及び講演要旨については、生物多様性センターのホームページから御覧いただけます。

CONTENTS

- 1 平成27年度ミヤコタナゴ保全シンポジウムを開催しました 1
- 2 房総のヒメコマツ観察会を開催しました 3
- 3 平成27年度生命のにぎわい調査フォーラムを開催しました 3
- 4 千葉県の外来種 (ウシガエル) 4

○ポスター発表

ポスター発表では、各地でミヤコタナゴを中心としたタナゴ類の研究や保全活動に取り組んでいる研究者、行政担当者等の12名から研究や活動の内容等について発表いただき、午前中の約1時間半、一般参加者との熱心な意見交換が行われました(図2)。



図2 ポスター発表の様子。

第一部 ミヤコタナゴとその保全を知る

魚類写真家の松沢 陽士氏から、ミヤコタナゴを中心としたタナゴ類の不思議な生態について、美しい写真を交えて紹介いただきました。「タナゴ類は非常に美しく、魅力的な魚であるが、全国的に減少しつつある。その原因は環境の悪化だけでなく、心ない愛好家等による過度な採集の影響によるところも大きい。」との現状報告もいただきました。

次に、平成27年度「文化の日千葉県功労者表彰(環境功労)」を受賞された御宿町ミヤコタナゴ保存会の伊藤 博明会長から、ミヤコタナゴの保全活動と課題についてインタビュー形式で紹介いただきました。「ミヤコタナゴの生息環境は現在も悪化しており、改善していくためには様々な方の協力を得ながら活動を広げていく必要があるが、一方で、密漁等の懸念もあり、情報公開等がしづらい。」とのお話がありました。

また、御宿町建設環境課の松下 泰之氏、茂原市生涯学習課の岸波 宗岳氏から、各地域での地域住民等と協力した取組内容と生息地を保全していくための今後の課題について紹介いただきました。

第二部 国内外での絶滅危惧淡水魚類の保全事例

国内外における絶滅危惧淡水魚類の先進事例として生物多様性センターからアメリカ合衆国におけるオレゴンチャブ保全の取組(詳細はニュースレター第46号に掲載)を紹介した後、三重県いなべ市生涯学習課の後藤 健宏氏から同市における天然記念物ネコギギの保護事業についてご紹介いただきました(図3)。

「いなべ市内のネコギギは、生息環境の改変により野生絶滅に近い状態まで減少してしまいましたが、生息環

境の積極的な改善と系統保存の取組の成果により、絶滅の危機から回復させるための事業が進みつつある。また、ネコギギの保全のためには、市役所の内外に積極的に情報を発信し関係者を増やすこと。それによるつながりを強めることでできることもある。」との情報をいただきましたが、その際には、やはり密漁等についての配慮が必要であるとのことでした。

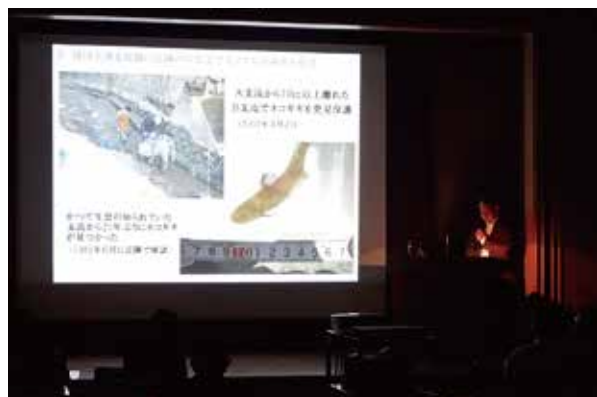


図3 三重県いなべ市生涯学習課の後藤 健宏氏の発表。

第三部 ミヤコタナゴの未来を描く：地域とともに守るミヤコタナゴの生息地(総合討論)

コーディネーターの三重県総合博物館の北村 淳一氏から三重県におけるタナゴ類の保全について、また、元千葉県立中央博物館 副館長の望月 賢二氏から千葉県内のミヤコタナゴの現状と課題について話題提供をいただいた後、会場からの意見を含めた総合討論を行いました。

会場からは、アメリカ合衆国の事例についての質問も寄せられましたが、オレゴンチャブの事例をミヤコタナゴに活用するためには、回復のための目標設定やロードマップを含めた回復計画を策定し、関係者で一層協力して保全を進めていく必要があり、その場合、行政や研究者だけでなく、生息地を保全していくためのNPO等の組織の協力が不可欠であるなどの議論がなされました。

さらに、ミヤコタナゴを守っていくために、地域資源としての活用の可能性について議論が行われました。その場合には、生息地を公開する必要があり、違法捕獲対策のための生息地情報の取扱いや監視体制の強化等が必要となり、現状では情報公開が難しいことも課題として挙げられました。

本シンポジウムで議論された内容も含め、ミヤコタナゴとその産卵母貝である二枚貝類を保全していくための課題は山積していますが、今後は課題を整理し、回復のための具体的な目標設定やロードマップの検討を行う等、「ミヤコタナゴを身近な魚に戻すための取組」を進めていきます。

(鈴木 規慈 千葉県生物多様性センター)

房総のヒメコマツ観察会を開催しました 平成28年2月27日(土)

「ヒメコマツ回復事業」の一環として、今後の保全事業への理解を得るため、毎年現地観察会を実施しています。今回はヒメコマツ系統保存サポーターを中心に、野生のヒメコマツがどのような環境に生育しているか、回復のためにどのような事業を行っているかを理解できるコースとして、鴨川市及び君津市にある東京大学大学院農学生命科学研究科附属千葉演習林内の2か所を選んで開催しました。

参加者を2班に分けて午前と午後でコースを入れ替え、講師として久本 洋子氏(東京大学大学院農学生命科学研究科 助教)、軽込 勉氏(同技術職員)、藤平 量郎氏(房総のヒメコマツ研究グループ・代表)、尾崎 煙雄氏(千葉県立中央博物館 主任上席研究員)に案内をお願いしました。

演習林内の荒檜沢周辺の急傾斜地に自生するヒメコマツの観察、札郷地区の苗畑及び集植場の見学、普段は開館していない森林博物資料館の見学等を通じて、ヒメコマツ保全の取組の成果と課題について詳しくご覧いただきました。

もともとヒメコマツに関心の高い方々が参加されたこともあって、たいへん熱心に見学していただき、接ぎ木苗と実生苗の生育特性の違いや、松材線虫病対策等についての質問も数多くありました。また、演習林内ではジンチョウゲの仲間のコショウノキがちょうど開花しており、初めて見た方には、その良い香りが印象的だったようです。早春の花を見ながらの充実した観察会となりました。

参加者は31名(ヒメコマツ系統保存サポーター 28名、生命のにぎわい調査団員2名、一般1名)、ヒメコマツ保全協議会5名、自然保護課・生物多様性センター職員10名でした。

(御巫 由紀 千葉県生物多様性センター)



東京大学大学院附属の千葉演習林にてヒメコマツ観察会

平成27年度生命のにぎわい 調査フォーラムを開催しました 平成28年3月12日(土)

県民参加型の生物モニタリング事業である「生命のにぎわい調査団」は、この3月で設立から7年8か月が経過し、団員は1,115名、報告件数は延べ約66,400件(1年間で約17,000件)となりました。

調査フォーラムを今年も開催し、生物多様性に関わる情報提供、団員からいただいた生き物調査報告の解析・報告システムの更新についての説明、並びに団員8名からの事例報告等を行いましたので、概要を紹介いたします。参加者は72名(団員43名、団員以外20名、職員9名)でした。

1 講演「両生爬虫類の話」

千葉県生物多様性センター主事 栗田 隆気
千葉県で見られる爬虫類、両生類を団員から寄せられた写真を中心に紹介しました。

2 講演「野外の危険な生物マダニとツツガムシ」

千葉県衛生研究所主任上席研究員 竹村 明浩
千葉県で毎年患者が報告されている、マダニが媒介する日本紅斑熱、ツツガムシが媒介するツツガムシ病、またダニ類の生態と刺されないための注意について解説しました。

3 報告「調査団の生き物調査報告のデータ解析」

千葉県生物多様性センター副主幹 御巫 由紀
調査団員からの生き物報告件数は年々急激に増加しています。設立当初の想定を超えたデータ数になってきたため、今春はシステムの見直しを行っており、その変更点を解説しました。

4 調査団員からの情報提供・観察事例紹介

①庭のキョン(村田 明久)

いすみ市内の自宅に設置したセンサーカメラで得られたキョンやそのほかの生物(ウサギ、タヌキ、ヤマシギ等)の画像を紹介・解説しました。

②キョンの食性観察(笠井 賢治)

御宿町でキョンの被害に対処するため食性を調査したところ、アシタバ、アオキを好むことがセンサーカメラで記録されました。

③ドライブレコーダーを利用した観察報告(望月 政樹)

手軽にできる観察報告として、鹿野山にある職場への通勤途中で出会うイノシシ、イタチ、シカ等のドライブレコーダー記録画像を紹介しました。

④鋸山の植生の特徴と希少種について(濱田 伸)

鋸山の植生の特徴と、アワチドリ、ヒカゲツツジ、トリガタハンショウヅル等、鋸山で見られる希少種の自生状況及び開花期等の記録を紹介しました。

⑤ 大やぶ池の四季 (柴田 清治)

千葉市緑区越智町にある大やぶ池とその周辺の谷津で見られる豊かな生物多様性を、筆による温かみのあるイラストと写真で紹介しました。

⑥ 遊び文化の伝承と子ども達の楽しめる自然観察会 (高見 等)

千葉市内の公民館で行っている小中学生対象の自然観察会の様子を紹介しました。自然体験不足が懸念されるため、自然への子どもへの関心を高める工夫が必要とのことです。

⑦ 千葉市で見つけたクモの話 (泉 宏子)

千葉市内でこれまでに確認したクモ135種の生息場所とユニークな習性、雄と雌の違い、卵のうの色・形、珍しいクモ等を報告しました。

⑧ 生命のにぎわいウォーキングのすすめ (大島 健夫)

生きものを観察して歩けば身近な道も楽しくなる、出会った生きものは報告すれば貴重なデータになる、と良いことづくめの経験を貴重な生きものの写真と共に紹介しました。

5 平成27年度写真コンテストの審査結果

応募33作品からフォーラム参加者の投票により、最優秀賞と優秀賞を決定しました。これらの作品は今後、センターの年報の表紙等に使用させていただきます。また、他の応募作品も県刊行物等に活用させていただきます。(御巫 由紀 千葉県生物多様性センター)



最優秀賞 ヘルソナ(仮面) ヤマカガシとトウキョウダルマガエル
浅野 俊雄さん



優秀賞 カメラ目線(ネコハエトリ) 金子 美織さん

千葉県の外来種

ウシガエル



ウシのように大きく、ウシのような声で鳴き、まるでウシのような、どことなく余裕を漂わせた顔つきで水辺にたたずんでいる—そんなカエルがいます。みなさんもご存じのウシガエルです。

もともとアメリカ合衆国東部に分布するカエルでしたが、1918年に食用肉として日本に持ち込まれました。当時は養殖が推奨されていたため、各地の養殖場に持ち込まれたりそこから逃げ出したりするうちに、現在では全国的に見られる外来種となりました。2005年には外来生物法における「特定外来生物」に指定されて、生きたまま保管・運搬することや野外に逃がしたりすることが法律で禁止されています。

日本ではカエル食が広く受け入れられることはありませんでしたが、それでもカエル料理を食べることができるレストランは散見されます。世界で食用ガエルと呼ばれるカエルには、トノサマガエルの仲間(ヨーロッパ)、ヌマガエルの仲間(中国・ベトナム)、トラフガエルの仲間(東南アジア)などがありますが、ウシガエルはこれらよりも体が大きく肉も多く取れます。

見た目では判別が非常に難しいウシガエルとウシの肉ですが、ウシガエルの肉は白身で淡白なので、食べてしまえば違いは一口瞭然です。食卓に上がる肉の中では鶏肉に似ているとよく評されますが、若干弾力が強く、噛むとプツリと切れるような食感が特徴的です。

ウシガエルを調理する時は皮をすべて取り除いてしまうことが多いようですが、他のカエルでは肉よりも味がよく染み込んでお酒とよく合うので、少しもったいない気もします。なお、カエル肉を刺身で食べる方もいるようですが、爬虫両生類の生食は重篤な寄生虫症を引き起こす恐れがあるので、揚げ物や焼き物など、よく加熱できる調理方法を選ぶことが大切です。

(栗田 隆気 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.48 平成28年5月31日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター (環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 (千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp>